2023年度「わいわい文庫」利用アンケートの結果と考察

専修大学文学部
教授　野口 武悟

はじめに

公益財団法人伊藤忠記念財団（以下、伊藤忠記念財団）では、2011年度からマルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の製作と寄贈を行っています。寄贈先の機関は、特別支援教育を行っている全国の学校（特別支援学校や、特別支援学級・通級指導教室を設置する小・中・高等学校）とその学校図書館、障害者サービスを行っている全国の公共図書館、医療療育機関や障害者施設などです。

寄贈した「わいわい文庫」の利用状況と意見を把握し、よりニーズに適った作品の製作につなげることをおもなねらいとして、伊藤忠記念財団では、毎年、寄贈先に対してアンケートを実施しています。

2023年度のアンケートへの回答は、寄贈先1,389件のうち1,290件から寄せられました（回収率92.9％：2024年1月28日現在）。本稿では、この2023年度のアンケートのおもだった結果を紹介するとともに、筆者による若干の考察を述べたいと思います。

なお、アンケート項目は、年度によって若干異なっています。過去のアンケート結果も参考になりますので、本冊子のバックナンバーもあわせてぜひお読みください。

おもなアンケート結果とその考察

(1)「わいわい文庫」の再生機器・表示機器・再生アプリ（複数回答可）

まず、「わいわい文庫」の再生環境について、再生機器、表示機器、再生アプリにわけてたずねました。

＜再生機器＞

回答	学校	図書館	その他	合計
Windows パソコン	584	261	103	948
iPad	149	29	29	207
プレクストーク	27	84	3	114
Windows タブレット	83	10	4	97
Chromebook	45	2	3	50
iPhone	1	3	4	8
Android	2	2	1	5
わからない	47	63	4	114

再生機器としては、WindowsPCが948で最も多く、iPadの207、プレクストーク（DAISY図書再生専用機）の114、Windowsタブレットの97が続く結果となりました。iPadとWindowsrタブレットは、どちらもタブレット端末ですので、再生機器としてPC、タブレット端末、プレクストークの順によく利用されていることがわかります。この傾向は、2017年度の同種の質問項目の結果とほぼ同様でした。

＜表示機器＞

回答	学校	図書館	その他	合計
Windows パソコン	458	249	92	799
大型テレビ	239	3	11	253
iPad	120	25	28	173
電子黒板	101	1	1	103
プレクストーク	22	71	3	96
プロジェクター	59	11	16	86
Windows タブレット	68	9	4	81
Chromebook	33	2	3	38
iPhone	2	3	4	9
Android	2	2	1	5
わからない	56	67	5	128

表示機器としては、WindowsPCが799で最も多く、次いで大型テレビの253、iPadの173の順となりました。特徴的なのは、大型テレビ、電子黒板、プロジェクターの利用傾向です。これらは、学校で多く利用されている一方で、図書館ではほとんど利用されていません。このことは、学校では授業での利用が多いこととも関係しているものと思われます（本稿（2）参照）。図書館では、個人利用が中心のため、ほぼ“再生機器＝表示機器”となっています。

＜再生アプリ＞

回答	学校	図書館	その他	合計
Chatty Book Express （「わいわい文庫」に付加されている自動再生機能）	429	211	72	712
のじぎく	74	6	15	95
Chatty Books	37	16	11	64
ボイスオブデイジー５	24	12	18	54
いーリーダー	25	13	9	47
わからない	201	98	19	318

再生アプリとしては、Chatty Book Express（「わいわい文庫」に付加されている自動再生機能）が712と大多数を占める結果となりました。

（2）「わいわい文庫」の利用場面（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
授業で利用	416	5	31	452
活用方法を検討中	234	85	28	347
図書館内での閲覧	146	164	12	322
個人（家庭）への貸出	63	227	32	322
休み時間などで自由利用	199	0	19	218
団体への貸出	2	94	5	101
イベント・行事で利用	30	51	17	98
自宅学習で利用	33	2	11	46

利用場面としては、全体として、「授業での利用」の452、「活用方法を検討中」の347、「図書館内での閲覧」と「個人（家庭）への貸出」の322などの順でした。学校では「授業での利用」が最も多く、図書館では「個人（家庭）への貸出」が最多となりました。

同種の質問項目は、2014年度、2017年度、2021年度のアンケートでもたずねています。いずれの年度の調査結果も、今年度の結果とほぼ同様でした。

「活用方法を検討中」が全体で２番目に多くなっている点に対しては、活用方法や事例等についての情報提供が必要でしょう。伊藤忠記念財団としては、すでに本誌『わいわい文庫活用術』での事例紹介、毎年度の「読書バリアフリー研究会」の開催などを通して、情報提供に努めているところですが、さらなる取り組みが求められているとも言えます。例えば、伊藤忠記念財団のウェブサイトで、すでに公開されている「わいわい文庫」の活用事例を検索・参照できるシステムの周知を進め、活用につなげることもその一つとなるでしょう。

わいわい文庫活用術：
https://www.itc-zaidan.or.jp/summary/ebook/waiwai-use/

(3)「わいわい文庫」の利用者（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
知的障害	421	43	52	516
学習障害（LD）	279	60	46	385
自閉症スペクトラム（ASD）	287	24	38	349
注意欠陥・多動性障害(ADHD)	270	27	27	324
視覚障害	93	116	23	232
肢体不自由	154	28	42	224
病弱	64	9	13	86
聴覚障害	50	22	11	83
外国籍 (Ver.BLUE のみ対象)	29	6	4	39
高齢者	0	22	0	22
わからない	59	117	7	183

全体としてみると、「知的障害」のある人の利用が最も多く、次いで「限局性学習症（SLD)」のある人、「自閉スペクトラム症（ASD)」のある人、「注意欠如・多動症（ADHD)」のある人などの利用が多くなっています。このことは、2021年度の同種の質問項目の結果とほぼ同様でした。

国際的にも、マルチメディアDAISY図書は、「知的障害」やSLDなどの「発達障害」のある人の読書に利用されることが多く、「わいわい文庫」も同様の傾向にあることがわかります。もちろん、表に示された結果から明らかなように、さまざまなニーズのある人が利用して、読書を楽しんでいることがわかります。マルチメディアDAISY図書が、ユニバーサルな読書メディアであることを改めて確認できる結果とも言えます。

(4)「わいわい文庫」の利用効果（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
読書への興味が高まった	376	85	56	517
興味関心の範囲が広がった	263	52	48	363
読む機会が増えた	198	42	36	276
文字への関心が深まった	109	17	20	146
語彙力が向上した	49	5	12	66
読みが上手になった	31	2	5	38
読破し自信をつけた	11	2	4	17
特に感じない	6	9	1	16
わからない	137	162	14	313

利用の効果としては、全体として、「読書への興味が高まった」が517と最も多く、次いで「興味関心の範囲が広がった」の363、「読む機会が増えた」の276などと続きました。この傾向は、学校と図書館のどちらも同じでした。

2016年度のアンケートにも同種の質問項目を設けましたが、このときは「文字への関心が深まった」が最多で、今回の結果とは異なりました。「わいわい文庫」を利用することで、文字だけでなく、読書そのものへの興味・関心の向上に効果を感じる学校や図書館が増えている表れと捉えることができるでしょう。

(4) 自由記述から

毎年度のことではありますが、今回のアンケートでも、たくさんの感想や要望が記述で寄せられています。それだけ、「わいわい文庫」への高い関心を示すものと言えます。

記述内容の半数以上は利用しての感想などで、好意的なコメントがほとんどです。好評だからこそ、さらなる期待を込めて、要望もたくさん寄せられています。特に、パソコンにCD・DVDのドライブが内蔵されなくなったり、タブレット端末での利用が主流となったりする中で、CD形態での「わいわい文庫」の頒布がかえって利活用を難しくしている面があることを感じさせるコメントが散見され、対策が急がれるといえます。すでに「わいわい文庫」の作品は国立国会図書館の「みなサーチ」(視覚障害者等用データ送信サービス)経由でオンライン提供もされていますが、さらなるオンライン提供の強化を期待したいと思います。

おわりに

2023年3月に政府が閣議決定した「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、4つの基本的方針の1つとして「多様な子どもたちの読書機会の確保」が明示されました。そして、「視覚障害者等が利用しやすい電子書籍等(「アクセシブルな電子書籍等」)の充実」等によって「学校図書館、図書館等の読書環境の整備が不可欠である」とされています。この「アクセシブルな電子書籍等」の中には、もちろんマルチメディアDAISY図書も含まれています。今後、「わいわい文庫」の果たす役割は、間違いなく倍加することでしょう。

また、2024年4月からは、改正された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(障害者差別解消法)の規定によって、私立学校や私立図書館などの民間事業者においても、障害者への合理的な配慮の提供が義務化されます。この

点からも、学校や図書館における「わいわい文庫」の必要性と重要性はさらに高まっていくはずです。

10年以上にわたる伊藤忠記念財団の電子図書普及事業、そして「わいわい文庫」による読書バリアフリーへの寄与は計り知れないものがあります。そして、これからも「わいわい文庫」を通して、読書バリアフリーを一層推進していってほしいと心より願っています。